

乳幼児の思いやり行動と家族の共感関係の検討

(分担研究：乳幼児期からの情緒の形成に関する研究)

首藤敏元

要約

本研究は、まず幼児における母子間の愛着と思いやり行動との関係を検討し、母親との愛着の安定度と仲間への自発的な思いやり行動との間に有意な関係を見出した。次に、家族関係の質を家族の共感関係から測定し、妻(母)の成長感が夫婦間の共感に規定されること、夫(父)の成長感は夫婦間と父子間の共感に規定されることを見出した。これらの結果を踏まえ、家族関係の質と乳幼児の思いやりの発達との関連性について考察した。

見出し語

愛着、家族、共感関係、思いやり行動

■ 研究目的

乳幼児の思いやりの発達を左右する家族の要因として、従来から思いやりを受ける経験、つまり家庭の中で愛される経験が必要条件になることが指摘されてきた。愛着研究の中には、乳児期に母親との間に安定愛着を形成していた幼児は、仲間に対して思いやり行動を示すことが多いことを報告した研究もあるが、先の見解は未だ理念の域を出ていない。本研究の第1の目的は、幼児期に焦点を当て、母親(養育者)と幼児の愛着と幼児の対人行動(思いやり行動、攻撃的行動)との関係を検討することである。

近年、母子関係の質や母親の育児ストレスが母親の要因だけに規定されるのではなく、夫婦関係や家族の育児体制のあり方といった家族の要因に影響を受けることが報告されてきた。幼児の思いやり行動と母子間の愛着との間に何らかの関連性が認められたとしても、それが父子関係や夫婦関係などの家族の多様な関係の複合的な結果である

ことも考えられる。そこで本研究の第2の目的は、母子関係に父子関係および夫婦関係を含めた家族関係のダイナミズムが幼児の思いやりの発達に影響すると考え、家族関係の質と家族の成長、特に父母(夫婦)の成長との関連を検討することである。本研究では、家族関係の質を相手の心理的状态への積極的関心とその共有、つまり共感関係からとらえ、子の気持ちに対する母親の共感と父親の共感、及び夫婦間での互いの気持ちに対する共感を測定する。そして、それらの共感と夫婦関係のよさ及び親としての成長感との関連を検討する。

■ 研究1

1. 目的

幼児期の母子の愛着を質問紙により測定し、また幼児の集団生活場面での向社会的行動(思いやり行動)と攻撃的行動を自然観察し、幼児期における母子間愛着と対人行動との関連性を検討する。

愛着理論に基づいて、次の作業仮説を設定した。

つまり、幼児の母親との愛着は、母子間を越えた対人関係の持ち方に関する内的表象として機能することから、母子間での愛着の安定さは仲間間での円滑な対人行動と関係するだろう。

2. 方法

1) 被調査者

埼玉県浦和市と大宮市の公立保育所2園と私立幼稚園2園に在籍する幼児を持つ母親（養育者）811名が愛着質問紙に回答した。また、愛着質問紙に回答した母親の幼児の中から60名（大宮市内のA幼稚園児、男女同数、平均年齢は5歳0か月）が対人行動の観察対象として協力した。

2) 材料と手続き

①愛着質問紙

愛着のQ分類法の項目を参考に、幼児期の愛着行動を表した28項目が作成された。回答方法は「ぜんぜん当てはまらない」から「よく当てはまる」までの5段階で評定する形式であった。調査用紙は幼児を通して家庭に配付され、約10日後に幼児を通して回収された。回収率は86%であった。

②対人行動の観察

各々の幼児につき、20分間の観察が1週間間隔で2度実施された。観察者は向社会的行動と攻撃的行動について予め決められた行動が見られた場合、具体的な行動内容と対象（子どもか大人か、性別と人数）と状況（自発的か誘発されたものか）を記録した。本研究は子ども（仲間）を対象にした行動を分析対象にした。したがって、向社会的行動には自発的な行動（自発）と他者の依頼に応える行動（依頼）の2つに、攻撃的行動は自発的な行動（開始）と他者の挑発に応える行動（挑発）の2つに区別された。

分類の信頼性を確認するために、10名の幼児の行動をビデオに録画した。そして、2人の観察者が独立してビデオの行動を分類し、一致率を計算した。一致率は.84から.92であり、分類の信頼性は高いと認められる。

3. 結果と考察

1) 愛着の尺度構成

項目分析の段階で、分布の偏りの著しい項目と項目-全体相関がマイナスか有意に達しなかった10

項目が削除された。次に、主因子法による因子分析が行われ、固有値1以上の因子2つが抽出され、バリマックス回転が実施された（寄与率は第1因子が.22、第2因子が.12）。第1因子には「叱られて泣いた後でも、いやな感情をいつまでも持ち続けない。」「怖いときや悲しいとき、病気のときやけがをしたときには、あなたの側にいたがる。」「抱きついたり、おんぶしたりするような、体がふれ合う遊びを好む。」「絵を見せたり、『こんなこともできるんだ』とやってみせたりして、あなたに認めてもらうことを喜ぶ。」などの安定した愛着行動を表す項目の負荷量が高く、第2因子には「いったん機嫌が悪くなると、あなたがなだめてもなかなかおさまらない。」「あなたにべったり甘えてきて、赤ん坊のように手のかかることがある。」「あなたの注意をしつこく引こうとする。」などの不安定な愛着行動を表した項目の負荷量が高かった。そのため、第1因子は「安定愛着」、第2因子は「不安定愛着」と命名された。

因子分析の結果に基づき、安定愛着得点と不安定愛着得点の2つが算出された。クロンバックの α 係数は、それぞれ.85と.69であった。性差を検定した結果、安定愛着は男児（ $M=3.70$, $SD=0.69$ ）よりも女児（ $M=3.90$, $SD=0.68$ ）の方が有意に高いことが認められた。不安定愛着には有意な性差は認められなかった（男児では $M=2.74$, $SD=0.68$ 、女児では $M=2.70$, $SD=0.72$ ）。

2) 愛着と対人行動との関連

一人につき合計40分間の観察時間中に、自発的な向社会的行動が平均1.4回、依頼に応えた行動が平均0.4回観察された。また、攻撃的行動を仕掛けた回数は平均0.7回、挑発された攻撃は平均0.3回観察された。性差は全て有意ではなかった。

愛着と対人行動との関連を見るために、性と月

表1 母子間愛着と幼児の向社会的・反社会的行動との関係（注1）

	n=60			
	向社会的行動		攻撃的行動	
	自発	依頼への反応	開始	挑発への反応
安定	.038	.071	-.355 **	-.011
不安定	-.417 **	-.158	-.112	-.281 *

* $p < .05$ ** $p < .01$

（注1）月齢と性を統制した偏相関係数

年齢の影響を統制した偏相関係数が求められた。表1に示されているように、不安定愛着が高いほど自発的な向社会的行動が有意に少ないこと ($r=-.42$)、安定愛着が高いほど仲間に攻撃をしかけることが有意に少ないこと ($r=-.36$)、不安定愛着が高いほど仲間からの挑発に攻撃的に反応することが有意に少ないこと ($r=-.28$) が示された。

これらの結果は、全体として幼児期における母子間の安定した愛着が良好な仲間関係と関連することを示唆するものであり、母親に愛される経験が他者への思いやりにつながるという見解を部分的に支持するものと思われる。

安定愛着と向社会的行動の間には有意な相関が認められなかった。本研究で観察された向社会的行動の多くは協力と分配行動であり、他者の情動喚起や対人葛藤を伴う場面ではなかった。つまり、自己の恐れや不安感を伴うものではなかったために、幼児の愛着表象が活性化されなかったものと思われる。この愛着表象の活性化は愛着と攻撃行動との関係で顕著に認められた。攻撃場面はストレスフルな状況であるため、自己のマイナスの情

動を制御し、円滑な行動方略を採らなければならない。本研究の結果から、安定愛着は自己の攻撃的な衝動を制御することと関係し、不安定愛着は他者からの挑発に伴うマイナスの情動を制御できず、正当な自己主張方略が採れないことと関係するものと思われる。

不安定愛着と自発的な向社会的行動の間にマイナスの有意な相関が見られたことは、愛着表象の喚起と情動制御の点からは説明できない。しかし、愛着の不安定さが幼児を仲間遊びから遠ざけ、向社会的行動の機会と学習のチャンスを失わせただけかもしれない。今後は、愛着と対人行動との関係のメカニズムに関するモデルを立て、それを実験的に検証していかなければならないだろう。

■ 研究2

1. 目的

本研究は家族の共感関係が家族関係の質の中心的要因であるとみなし、(1) 親子間と夫婦間の共感関係を測定する尺度を作成し、(2) それらと

表2 質問項目の例

<親子の共感関係>

子どもが気持ちがひとつになっていると感じたことがある。
 子どもが悲しそうにしているとき、その気持ちを感じとろうとしたが、ピンとこなかったことがある。
 子どもを叱ったあと、子どもがどんな気持ちになったかを想像したことがある。
 子どもが泣いていたとき、その気持ちをわかろうとしたが、なぜ泣くほどに悲しいのか理解できなかったことがある。
 子どもが何かを期待しているとき、そのわくわくした気持ちを感じとったことがある。
 子どもの話や表情から、子どもの気持ちを感じとろうとしたことがある。

<夫婦間の共感関係>

夫(妻)と気持ちがひとつになっていると感じたことがある。
 夫(妻)がつらそうにしていたとき、その気持ちを感じとろうとしたが、ピンとこなかったことがある。
 夫(妻)のしぐさや行動から、夫の気持ちを感じとろうとしたことがある。
 自分の言動から夫(妻)がどんな気持ちになったかを想像したことがある。
 夫(妻)がくやしそうにしていたとき、そのくやしさが痛いほどわかったことがある。
 夫(妻)の表情から気持ちを読み取ることはできても、自分は同じような気持ちにならなかったことがある。

<夫婦関係>

私たち夫婦はお互いによく理解し合っている。
 夫(妻)は私に関心を払ってくれない。
 夫(妻)と私は仕事や子育ての喜びを分かち合っている。
 私は夫(妻)から愛されている。

<親としての成長感>

子どもが生まれる以前と比べて、夫(妻)と話し合う機会が多くなり、より強いきずなを感じるようになった。
 子どもが生まれる以前と比べて、自分の親を尊敬できるようになった。
 子どもが生まれる以前と比べて、夫(妻)に優しくなった。
 子どもが生まれる以前と比べて、夫婦の時間が減り、会話も少なくなった。

家族(夫婦)の成長との関係を検討することを通して、幼児の思いやりの発達を支える家族の共感関係の働きについて考察することを目的とした。

2. 方法

1) 被調査者

埼玉県大宮市の公立保育所4園と春日部市の私立幼稚園1園に在籍する乳幼児の保護者(母親と父親)が調査に協力した。母親用と父親用の質問票をセットにし、合計615組の質問票が配付された。全体の回収率は67.8%であった。

2) 調査項目

①親子間(母子間と父子間)での共感関係

幼児の心理的状态への積極的関心(理解への動機づけと視点取得)とその共有(一体感)と非共有(個別性の認識)を表した21項目を作成した。社会的望ましさの影響を除くため、質問文は経験を問う表現にした。回答形式は「全く経験しない」から「いつも経験する」までの6段階評定を用いた。

②夫婦間の共感

夫(妻)の心理的状态への積極的関心(理解への動機づけと視点取得)とその共有(一体感)と非共有(個別性の認識)を表した20項目を作成した。親子間の共感関係と同様に、質問文は経験を問う表現にし、回答を6段階評定で求めた。

③夫婦関係のよさ

夫婦関係のよさを表した7項目を設定した。回答形式として、「全く感じない」から「強く感じる」までの6段階評定を用いた。

④親としての成長感

子どもを持ってからの親として、人間としての成長を表した9項目を作成した。回答は6段階評定であった。

3) 調査時期と調査手続き

保護者への質問票は園を通して配付され、約10日後に回収された。回収の際、プライバシー保護の目的から、母親用と父親用の質問票を別々の封筒にのり付けをして回収できるような配慮がなされた。調査時期は平成8年10月から同年12月であった。

3. 結果と考察

1) 尺度構成

①親子間の共感

母子間と父子間の共感それぞれについて、まず

21項目ごとに得点のばらつきと項目-全体相関を計算した。この段階で削除された項目はなかった。次に、主因子法による因子分析を行い、固有値が1以上の因子を抽出し、バリマックス回転にかけた。母子間共感と父子間共感のいずれも2因子が抽出された。因子の寄与率は、母子間共感では第1因子.21と第2因子.15、父子間共感ではそれぞれそれぞれ.21と.12であった。

②夫婦間の共感

同様の手続きにより、項目分析と因子分析が行われ、妻と夫のいずれにおいても2因子が抽出された(妻の第1因子と第2因子の寄与率はそれぞれ.23と.16、夫ではそれぞれ.25と.18であった)。

親子間と夫婦間の共感とも、また母親(妻)と父親(夫)のいずれにおいても、相手の心理的状态への積極的関心と共有を表す項目が第1因子に高く負荷し、非共有(積極的関心を示した場合も含む)の項目が第2因子に高く負荷していた。このように、共感の成立する過程に対応した因子が表れるのではなく、共有と非共有という結果に対応した因子が表れた。共感を経験から見た場合、共感相手との一体感を感じる側面と、自己と相手との個別性の認識に至る側面とがあるものと思われる。そのため、親子間(母子、父子)と夫婦間(妻、夫)のいずれの共感においても、第1因子は「共有」、第2因子は「個別」と命名された。

各因子に対応した項目値から尺度得点が計算された(平均値)。その際、尺度の内部一貫性を確認するために、クロンバックの α 係数が求められた。 α 係数は母子間の共有では.86、個別性では.81、父子間ではそれぞれ.86と.76、妻の夫婦間ではそれぞれ.87と.81、夫の夫婦間ではそれぞれ.88と.85となり、尺度としての信頼性の高さが証明された。

③夫婦関係のよさと親としての成長感

同様の手続きで分析した結果、いずれも1因子構造であることが認められた(妻から見た夫婦関係の寄与率と α 係数はそれぞれ.55と.89、夫の夫婦関係では.50と.86、妻から見た成長感ではそれぞれ.28と.71、夫では.28と.72であった)。

2) 尺度得点の平均値

父母および夫婦のデータのそろった被調査者を対象に、父母(夫婦)間の差を検定するために、繰り返しのあるt検定が行われた。その結果、親子間の共感では、共有の側面において母親の得点

(M=4.75, SD=0.64) は父親の得点 (M=4.51, SD=0.68) よりも有意に高く ($t=5.26$, $df=361$, $p<.01$)、夫婦間の共感では個別性の側面において妻の得点 (M=3.34, SD=0.74) は夫の得点 (M=3.51, SD=0.79) よりも有意に低かった ($t=3.49$, $df=360$, $p<.01$)。他の得点に関しては、父母間、夫婦間に有意差は認められなかった。

3) 共感関係に関する尺度の相互関連性

親子間と夫婦間での合計8つの尺度得点間のピアソンの積率相関係数が計算された。同一回答者の各側面の間に中程度以上の相関関係が認められた (母子間の共有と妻の夫婦間の共有 $r=.43$ 、母子間の個別と妻の夫婦間の個別 $r=.43$ 、父子間の共有と夫の夫婦間の共有 $r=.63$ 、父子間の個別と夫の夫婦間の個別 $r=.48$ 、いずれも $p<.01$)。また、異なる回答者でも母子間の共有と父子間の共有 ($r=.13$) および夫の夫婦間の共有 ($r=.16$)、母子間の個別と父子間の個別 ($r=.25$)、父子間の共有と妻の夫婦間の共有 ($r=.14$)、父子間の個別と妻の夫婦間の個別 ($r=.11$) の間に弱いながらも統計的に意味のある相関関係が見られた。これは、家族間の気持ちの交流としての共感関係の一端を示すものと思われる。

4) 夫婦間の共感関係と夫婦関係のよさとの関連

夫婦間の共感の共有の側面は夫婦関係のよさとプラスに相関していた (妻の場合 $r=.56$, $p<.01$; 夫の場合 $r=.55$, $p<.01$)。一方、個別はそれとマイナスに相関していた (妻の場合 $r=-.43$, $p<.01$; 夫の場合 $r=-.33$, $p<.01$)。興味深いことに、夫婦の共感相手から見た夫婦関係とも有意に相関していた。つまり、妻から見た共感と夫から見た夫婦関係のよさとの相関 (共有とは $.20$ 、個別とは $-.20$)、及び夫から見た共感と妻から見た夫婦関係のよさとの相関 (共有とは $.11$ 、個別とは $-.16$) が弱いながらも統計的に有意に達した。この結果は夫婦間の共感が夫婦関係の質と関連することを示しており、尺度の妥当性を支持するものと解釈できる。(表3)

5) 家族の共感関係と家族の成長との関係

親としての成長感は家族の成長の一端を表していると考え、親子間と夫婦間の共感が親としての成長感をどの程度予測できるのかについて分析が行われた。すべてのデータのそろった310名を対象に、夫と妻の成長感の得点について、家族の共感に関する8つの下位尺度の得点と6つの人口統計学的要因 (子どもの数、祖父母との同居の有無、母親の

年齢、結婚年数、母親の仕事の有無、父親の年齢) を独立変数とした重回帰分析が行われた。その結果、いずれの分析においても、重相関係数は有意になった。人口統計学的要因の β 係数は部分的に有意になっているものの、強い寄与は認められなかった。

妻の成長感には、妻から見た夫婦間の共感 (共有の $\beta=.47$ 、個別の $\beta=-.28$ 、いずれも $p<.01$) が有意に影響していた。さらに、夫の夫婦間の共感の個別性の側面 ($\beta=-.11$, $p<.05$) がマイナスに有意に影響していた (全独立変数の寄与率は $.31$, $F=9.52$, $df=14/295$,

表3 夫婦の成長感に及ぼす親子間と夫婦間の共感の影響

	n=310			
	妻からみた成長感		夫からみた成長感	
	r	β	r	β
子どもの数	.003	.094	-.086	-.080
祖父母との同居の有無	-.095	-.076	-.025	-.032
母親の年齢	-.037	.057	-.030	.016
結婚年数	-.037	-.045	.019	.052
母親の仕事の有無	-.040	-.037	-.090	-.069
父親の年齢	-.057	.002	-.011	.028
母子間共感：共有	.174 **	.015	.092	-.004
母子間共感：個別	-.054	.094	-.054	.009
父子間共感：共有	.026	-.020	.450 **	.215 **
父子間共感：個別	-.015	.016	-.104	-.084
妻から見た夫婦間共感：共有	.467 **	.469 **	.148 **	.059
妻から見た夫婦間共感：個別	-.270 **	-.277 **	-.014	-.009
夫から見た夫婦間共感：共有	.078	.018	.499 **	.364 **
夫から見た夫婦間共感：個別	-.095	-.112 *	-.041	-.024
	寄与率	.311	寄与率	.310
	F値	9.515	F値	9.467
	df	14/295	df	14/295
	p	**	p	**

* $p<.05$ ** $p<.01$

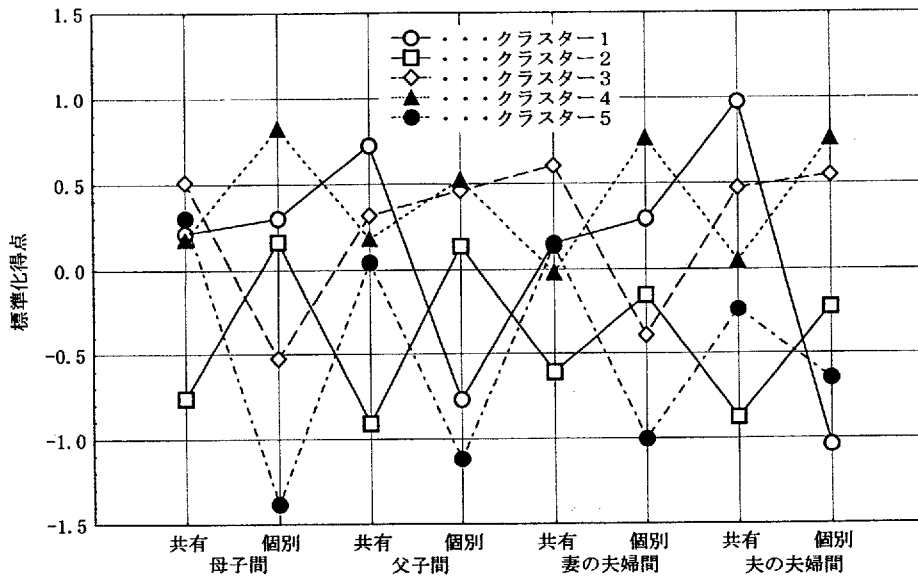


図1 家族の共感関係に関するクラスター

$p < .01$)。夫の成長感には夫の夫婦間共感の共有の側面 ($\beta = .36, p < .01$) が有意に影響していた。また、父子間の共感の共有の側面 ($\beta = .22, p < .01$) が有意に影響していた (全独立変数の寄与率は .31, $F = 9.47, df = 14/295, p < .01$)。

これらの結果は妻の成長感には夫婦関係の質が、夫の成長感には夫婦関係と父子関係の質が影響することを示している。これらの結果は、家族の成長にとって夫婦関係と父子関係の重要性を指摘するものである。父子関係と夫婦関係の質が高くなることが夫婦の成長感を高め、全体としての家族関係の質を高めていくことにつながるものと思われる。

子どもの共感性の発達が思いやりの行動の発達を左右する要因であることが以前から指摘されている。子どもは親から共感的な養育を受け、親同士の共感的なかわりを観察することを通して、他者と共感的にかかわろうとする動機づけと行動スキルを発達させるものと思われる。思いやり行動は自己制御された行動であることから、今後、自己意識の芽生えるころ (1歳半程度) の幼児を対象に家族の共感関係と幼児の思いやり行動の発達との関連を検討することが課題である。

6) 家族の共感関係の型の探索的分類

親子間と夫婦間の共感関係に基づいて気持ちの交流を軸とした家族関係の質を探るために、探索

的に尺度得点のパターン化が行われた。まず、8つの尺度得点が標準化され、それらの得点をもとにK-Means法によるクラスター分析が行われ、家族の分類が行われた。探索的にクラスター数を3から10まで変化させ、クラスター間の距離とクラスターの解釈可能性を基準にしながら、最終的に5つのクラスターを決定した。クラスターを要因とする一要因分散分析の結果、8つの尺度得点のすべてにおいてクラスターの主効果が有意であった。

図1に示されているように、クラスター1は55のケースから成り、父子間と夫から見た夫婦間では個別よりも共有が顕著に高く、母子間と妻から見た夫婦間では両者が同程度に高いことが特徴的である。クラスター2は88ケースから成り、親子間と夫婦間のすべてにおいて共有よりも個別の側面が強いのが特徴的である。クラスター3は68のケースから成り、母子間と妻から見た夫婦間では共有が個別よりも高く、父子間と夫から見た夫婦間ではそれらが同程度に高いことが特徴的である。クラスター4は84ケースから成り、クラスター2と同様なパターンを示している。しかし、親子間と夫婦間の両方において共有と個別がともに高い得点を示していることが特徴的である。クラスター5は43ケースから成り、親子間と夫婦間のすべてにおいて、個別よりも共有が顕著に高いことが特徴的である。

クラスター間に人口統計学的な差異はほとんど認められなかった。つまり、クラスターの度数に、祖父母との同居、妻の就労、幼稚園-保育園、結婚年数、夫の年齢による差異はすべて有意ではなかった。しかし、妻の年齢を「30歳未満」「30-34歳」「35歳以上」に分類した場合、「35歳以上」の妻を持つ家族にはクラスター2が多く(36.7%、他の群は16.7%と19.9%)、「30歳未満」の妻を持つ家族にはクラスター5が多い(21.4%、他の群は12.6%と10.2%)という結果が認められた

($\chi^2=15.56$, $df=8$, $p<.05$)。

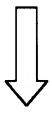
5つのクラスターは家族の共感関係の差異を反映したものである。各クラスターが共感関係以外の面でどのように異なるかを検討することにより、家族関係の型としてのクラスターの特徴が明らかになるものと思われる。今後、家族内コミュニケーションの量や質、養育態度、子どもの思いやり行動などの点で、クラスター間の比較を行うことが課題である。

Abstract

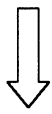
The role of empathic relations among family members in young children's altruism

Toshimoto Shuto

This study examined the role of a mother-child attachment and empathic relations among family members in the development of young children's prosocial behavior. The results indicated that young children's spontaneous prosocial behaviors were motivated based on a secure mother-child attachment, and a quality of family relationship was enhanced by a father-child and a husband-wife empathy.



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要 約

本研究は、まず幼児における母子間の愛着と思いやり行動との関係を検討し、母親との愛着の安定度と仲間への自発的な思いやり行動との間に有意な関係を見出した。次に、家族関係の質を家族の共感関係から測定し、妻(母)の成長感が夫婦間の共感に規定されること、夫(父)の成長感は夫婦間と父子間の共感に規定されることを見出した。これらの結果を踏まえ、家族関係の質と乳幼児の思いやりの発達との関連性について考察した。